



岡井 健 (おかい けん)
NPO 法人日光門前まちづくり 理事長

1978年 日光生まれ
2001年 東北芸術工科大学デザイン工学部環境デザイン学科 卒業
(現在は建築・環境デザイン学科に改称)
2001年～2003年 (株)都市創造研究所 研究員
2004年～2010年 (株)荒井技研
2006年～2009年 NPO 法人日光門前まちづくり 理事
2009年～ 同 理事長

現在は日光と仙台での二点居住生活を送りながら、日光門前地区のまちづくり活動と仙台沿岸部の復興まちづくりのサポートを行っている。

「虫の目と鳥の目」からはじまったまちづくり

——いつ頃から日光のまちづくりに取り組まれていますか？

NPO 法人の設立が 2006 年からなので 8 年になります。でも、もともと大学でまちづくりや都市計画について勉強していたので、ずっと自分のまちのまちづくりについて何かやりたいと思っていました。それが、今から 15 年ほど前に、以前からあった大通りの拡幅事業計画が動き出して、同時にまち並みを考えようという話が持ち上がったんです。これを期に、住民と行政が話し合いを始めました。それで、まずまち並みやまちづくりの基本になるルール、「まちづくり規範」を策定したんです。規範を決めたら、次はそれを誰が運用するか、「まちづくり」として担うか、ということになり、今我々が活動している「NPO 法人日光門前まちづくり」がつくられました。

——活動を始められたきっかけは？

「自分のまちをよくしたい」というのが根っこにありました。大学で環境デザインを専攻したので、学んでからはより一層その気持ちが強くなりました。日光は古いまちなので、未だに NPO に対する誤解も大きく、「何かいいことをしてくれる人たち」とか「ボランティアでしょ」という認識があります。また、古いまちならではの年功序列があって、僕みたいな当時 20 代半ばの者が「まちづくりだ」と言っても相手にしてもらえません。そんな状況の中でやってきて、やっとここ 2～3 年位で活動の芽が出てきたかなと思います。共感してもらえる輪がようやく広がってきました。まだまだ大きな成果にはなっていませんが、でも我々の活動を理解して「手伝うよ」と言ってくれる人が現れ始めたのが、ひとつの支えになっています。

大学でも先生に絶えず「虫の目と鳥の目の両方を持つこと」と言われていました。つまり、ミクロ(虫)な視点とマクロ(鳥)な視点を場面によってバランス良く持つという事なんです。当然の事

として語られますが、これが結構難しい。まちを鳥の目になって見てくれる人が何人かいれば、地域の活動ももっとよくなるんじゃないのかなと思います。

「日光らしさ」の息づくまち並みをめざし、話し合いの場をコーディネート

——現在のメインとなる活動を教えてください。

まち並みづくりです。まち並みは、まちづくりの中でも非常に難しいテーマだと思っています。土地も建物も個人のもので、持ち主が自分たちの家を建て替えていく中で、まち並みの連続感や調和をどう出していくかというのが非常に難しい。日光というと、昔からの古いまち並みがありそうなイメージを持たれると思いますが、実はそうでもないんです。過去に大水で流されていますし、何度も大火に遭っていますから、古い建物がそう多くは残っていません。コンセプトとして「和風を基調にしたまち並みづくり」を掲げていますが、実際の生活の場で形にするのはすごく難しいんです。

——具体的には、岡井さんはどんな役割ですか？

話し合いの場をコーディネートしたり、行政と住民との橋渡しをしたりするのが、僕達の役目だと思っています。行政には、NPOを立ち上げる時は色々後押しをしてもらい、その代わり住民の意見のとりまとめ役を期待されていました。でも活動を始めると、住民同士だからこそ話し合いがしにくい部分があることに気づきました。「近くて遠い」という実情もありますから。だから、やはり行政に登場してもらわないといけないこともあるし、さらに外からの応援が必要になることもあります。そういう様々な立場の組織や人をコーディネートするのが我々の仕事なんです。前述のように、なにかとしがらみも多いですけど。



▲気軽にまちづくりを話し合う場として
「日光まちづくりカフェ」を開催

▲かわら版による情報の発信▲

「祭（いのり）のまち」のまち並みづくりのテーマは、調和と連続性

——まち並みづくりは、どのくらい進んでいますか？

日光には駅前から東照宮二社一寺までの間に6つの町内があります。まち並み整備を順々に進めていて、ひとつの町内に約5年間かけています。今、ふたつ目の町内に取り掛かっていて、あと2年くらいで終わると思います。通り全体では後20～25年位の計画になっています。

——岡井さんがめざす日光の姿をお聞かせください。

世界遺産の二社一寺の門前まちですので、景観が大切だと思っています。僕らが進めているまち並みづくりは、外観の「統一」ではありません。目指しているのは、調和とか連続性なんです。和風で統一というと、時代劇のセットみたいになってしまう。実際の生活感も大切にしないといけないと思

います。我々のはもう少し自由度がありながら、色の系統を守ったり、軒の高さを揃えたりすることで調和と連続性を出そうというものです。

そこで日光らしさを味わえるものに、どれだけなれるかですね。駅前から神橋までの一带に我々のまちがあって、その奥が二社一寺ですけれども、今は「まちの印象が薄い」とよく言われます。旅の大きな目的は社寺や奥日光の自然なので、まちはほとんど記憶にない。お土産を買って終わり。そういう話を聞くにつけ、まだまだまちで楽しんでいただけてないなあと思います。

お祭りの多いまちですので、「祭（いのり）のまち」というのが我々のまちづくりのコンセプトとなっているんですが、これは、そうした日光の民俗的な側面も含め、いろんな祈りが集まってくる場所性としての意味もあります。まちを特徴づけるキーワード。もっとそういう「らしさ」を追求して、打ち出せていければと思っています。



▲日光門前地区のまち並みと日光弥生祭

「結果観光」という理想のひとつの形

——同様の取り組みで成功しているまちはありますか？

もちろんそれぞれの特殊解であると思いますが、長野県の小布施が思い浮かびます。このまちは「修景」をテーマに、国内でも早くからまち並み整備に取り組んで、成果を出しています。「結果観光」という言葉を使っていたかな。人を呼ぼうという目的が最初にあるのではなくて、自分のまちの「しつらえ」を考えていたら、結果的に人が集まるような場所になったわけです。それって、ひとつの理想形だと思いますね。また、「内は自分のもの、外はみんなのもの」という考え方を合い言葉として取り組んでいたと思います。魅力的ですね。古いものを活かしながら、ただの保存ではなくて、これからの世代に向けてきちんと活かしていく、ああいう方法は素敵だなと思います。建物を曳いて配置をかえたり小道をつくったりして、まちを面的に考えてつくっています。

訪れた人に、小さな感動の積み重ねをお持ち帰りいただきたい

——日光を記憶に残る「感動」あるまちにするには、何が必要でしょうか？

まちが感動を与えるとすれば、それは毎日に「ハレ」の時間をつくるというのではなく、小さくても心を動かす何かがあるということが大事だと思います。我々の日光で言うと、お客様に観光で来ていただいたら、小さい感動の積み重ねをお持ち帰りいただくという感じだと思います。日光の場合は、決定的な来訪目的がいくつかある中でやってきた土地なので、それ以外の小さい感動を提供しようといった発想や取り組みはあまりなかったように思います。それを作り出すのが、我々のひとつの目標でもあります。「ケ」つまり日常の中に魅力を感じてもらえるまちでありたいですね。

「日光マルシェ」は地域の魅力を掘り起こす、まちづくりの新しい試み

——NPO仲間との活動や交流の中で、感動を覚えた瞬間はありますか？

活動によって外に与える感動もありますが、一方で組織を運営・マネジメントしていく中で、何かができるたびに積み重なっていく小さな感動もあります。もっともそれに喜びを求めないと、ボランティアは成り立たないですね。

少し前から「日光マルシェ」という催しを門前町の中でやっています。青空市ですね。地元の産品をはじめ、手づくりの雑貨の店や食べもの屋さんが出店してくれて、賑わいました。最初は不安もありましたが、我々の年代に近い人達が乗ってくれて、やってみたら「次も楽しみに待っています」という声があつて。そんな達成感が我々の活動を支えているんだと思います。マルシェを通して、地元の産品をもっともっと掘り起こしたいですね。これまでは、あまりにも観光物産品だけにスポットが当たってきましたから。もうちょっとまちの周りを見回すとおいしいもの、良い仕事がたくさんあるんじゃないかと思うんです。

僕らは、マルシェもまちづくりのひとつの方法だと思っています。公園や駅前広場、神社の境内のような公的な空間と店先空間や空き地のような民地の両方で同時多発的に開催して、各会場を廻ってもらっています。まちの使い方や体験のしてもらい方は色々あると思うので、まずやってみようということから始めました。もっと発展していく可能性はありますし、これからがとても楽しみです。



▲日光マルシェはほぼ季節ごとに開催している

自分を育ててくれた東北で、復興まちづくりを

——岡井さんは現在、東北の震災復興まちづくりにも関わられています、その経緯を教えてください。

僕は生まれと育ちが日光ですが、山形の大学を出て就職したのが仙台でした。仙台の街なかの商店街の活性化事業などの仕事をしていました。その後2004年頃に地元日光に帰って来ましたが、震災の1年位前から仙台とのつながりが少し戻って、度々遊びに行くようになっていたんです。実は、震災の当日も、夜に仙台で打ち合わせの予定があったので、車で宮城に向かっていました。ちょうど東北自動車道の白河を過ぎたあたりで、強い揺れに遭いました。その時は仙台に行くのを断念して帰って来ました。東北は自分を育ててくれた大切な場所なので、何か自分にできる事はないかとずっと思っていたところ、ご縁をいただいて去年の1月から復興のお手伝いと呼んでいただき、あちらでの仕事を始めました。

行政と住民の間で、話し合いの場をサポート

——仙台での仕事は、具体的にはどのようなものですか？

行政からの委託で、仙台の沿岸部にあるまちの復興まちづくりをお手伝いしています。田んぼの中に農集落が点在するところなんです。そこが、津波の被害にあいました。まずビジョンを描くために集まって話をする場のコーディネートをサポートし、それからまちづくりの指針の作成をお手伝いしました。毎週水曜日に集まって住民の方達と話をして、去年1年間で約60回程やりました。それでやっとまちづくりの基本計画ができ、今まさに、それを「復興まちづくりプロジェクト」として実行に移そうというところです。

——行政と住民の間で働くのは、大変なお仕事だと思いますが。

鳥の目になって見ると、どこかに線は引かないといけないんですね。手当てをしようとするれば、範囲を決めなくちゃならない。その中で、いろんな立場の意見をコーディネートするのは、やはり難しい。行政の言葉を上手く翻訳して住民に伝えないといけないし、住民の方の想いもきちんと整理して行政に伝えなくてははいけません。

これまでも全国の色々な公共事業で、税金の無駄遣いだと評されることがありますね。それらは、実際に使う人や住んでいる人の話を聞くという努力をしてこなかった結果でもあると思います。例えば、話し合いの場があれば、採用された意見が自分のものと違っても、話し合いに参加して自分の意見も言ったということで、理解や納得の仕方が全然違う。ワークショップのような方法もありますし。そういう場があったかなかったかで大違いなわけですよ。これまでのように「説明するだけ、されるだけ」みたいな場をもつ意味は、そうはないと思います。場をコーディネートできる人やしくみがなかったことが、大きな反省点じゃなかったかと思っています。



▲東日本大震災で津波の被害に遭った仙台沿岸部の様子

——他に、現地で問題になっていることを教えてください。

今は、震災遺構の話が度々取りざたされていますね。津波の爪痕を後々まで伝える遺物を残すかどうかの議論です。広島原爆ドームも20年近くかけてやっと残す決定をしたと聞きます。もう見たくないという意見も当然あったようですが、今になればあれが平和都市広島のシンボルになっています。東北でも色々と議論されていますが、一方で公費などで解体ができる時期が迫っている、などという現実もあるわけです。この間、ある震災遺構のシンポジウムの時に出た話ですが、中越地震の遺構のいくつかについて、当初は「もう見たくない、すぐ撤去を」と言っていた方々も、生活の再建が落ち着くと逆に「この災害を伝えるために残して欲しい」と意見が変わっていったそうです。今回の東日本大震災の遺構がどのような形でこの震災の記憶を記録として次代につないでいける事になるのか、注視したいと思っています。

震災によって、みんなが「故郷感」を抱いたはず

——震災から2年経って、何かお感じになることはありますか？

震災の後、「絆」とか「つながり」という言葉がずいぶん使われましたが、この後どうなるかだと思います。10年15年20年後に、日本は東北を見ているのでしょうか。先日、2回目の3月11日が来しました。被災地は鎮魂、静かな中であつたと思いますが、報道はその温度にどう寄り添っていたのでしょうか。個人的には疑問があります。すでに少しずつ「乖離」がはじまっているような気がします。今お手伝いしている地区に最初におじゃました時も、本当に緊張しました。何を言っているのか、どんな顔をして行ったらいいのか、まずわからなかった。今でも時々思い出します。

当然、震災の経験、被害状況は様々です。しかし、震災の時、日本中の誰もが少なくとも何かを感じ、何かを省みたと思うんです。自分の故郷が心配になったとか、家族や大事な誰かが心配になったとか。それぞれの「故郷感」というか…そのことを忘れちゃいけないんだと、僕は思っています。その時の気持ちを考える機会が毎年やってくる3月11日だと思うんです。津波で大きな被害に遭われた方々とは、状況を含めて全ては一緒にはなれないけれど、誰の中にも何かしらの残したはずの震災だったと思いますね。

地域活動で味わう、深く徐々に染み込むような感動

——地域活動の中でどのような「感動」を経験されましたか？



仕事のスパンが短ければ、達成した時の感動も起こりやすいでしょうけど、我々の仕事はスパンが長いからです。また、常に主役は我々ではなくて、そこに住んでいる人です。我々は黒子ですね。10年20年先に仕事が完了したとして、その時に自分が関わっているかどうか分からない。そういう世界なんです。

だから、我々が仕事で味わえる感動は、単なる感情の高ぶりじゃなくて、共感や共鳴に近い。小さな感動よりもまたさらに深い、気づいたら何かじんわり伝わっている、徐々に染み込んでくるような心の動きじゃないかと思います。

まちを歩いて発見する、小さな感動が楽しい

——ご自身の感動体験を教えてください。

感動にも大小色々ありますよね。大きな方の体験は…うーん、音楽が好きなので、ライブに出かけたりする事を楽しみにしていますが、野外フェスなどは大きな感動を共有できる場ですね。キャパシティが大きければそれはもう、ひとつの都市ですよね。

小さい感動は、まちを歩いていて発見することがあります。本当にちょっとしたことですけどね。いいなと思うお店の店先とか。当然、作り手の気持ちが出るものです。そういうものに出会うと、ちょっと感動します。

たとえ通勤などで毎日行き来している限られた範囲でも、何かしらの発見はありますからね。見ているようで見ていないことが多いですよ、まち並みだったり建物だったり。

まず興味を持つことが、感動への入り口

——感じることに、そして感動することに必要なものは何でしょうか？

これは「興味」じゃないかと思います。今は、自分の興味の対象をどこまでも追っていける時代ですよ。インターネットをはじめ色々なツールがあるし。でも、もう一方で、まちの中での発見みたいに、普段自分を取り巻くものの中からも、発見することができる。だから、自分の興味を狭くしてしまうのはつまらないことなのだと思います。何でも興味を持つというのが、感動への入り口かな。

ですから、我々がまちづくりを考える時も、何か興味の入り口となる「仕掛け」があるといいなと思います。

「深く染み透る感動」は、地道な仕事の活力になる

——これからの活動の抱負と、夢を教えてください。

まちづくりは、明確な成果が見えにくい活動です。また、説明も理解してもらうのも難しい活動でもあります。でもその中で一緒にできる仲間が少しずつでも増えてくれることを願っています。共感とか充足感、染み込むような小さいけど深い感動を多くの仲間と一緒に味わいたいですね。一回深く染み込んだものは、なかなか無くならないでしょう。吹き出すような感動はインパクトがあって記憶に残り、もちろんそういう瞬間も必要ですが、そうではない「深く染み透る感動」は地道な仕事を長く続けていくための力になると思います。

夢は、住む人の想いが滲み出るような美しいまちにする、そのお手伝いを、日光、仙台はじめ色々なまちでたくさんする事ですね。

インタビュー後記

訪ねたまちで人とふれあい、歴史を感じ、風景に溶け込む。訪れる人に小さな感動を持ち帰ってもらう為、地域みんなが納得し、着実に進めてゆく日光のまちづくり。今回のインタビューで岡井さんは、柔和な笑顔でとても謙虚にお話をされました。また、日光と仙台に拠点を置く行動力ある人でもあり、きっとそれが人を引き付ける岡井さんの魅力と思いました。

今後、地域のリーダーとして日光の魅力、地域の魅力を発信するなか、多くの感動が生まれることを期待しています。